

2024年7月28日 久宝教会 聖霊降臨節第Ⅱ主日礼拝メッセージ

「私を思い出して下さい」

牛田匡牧師

聖書 コリントの信徒への手紙Ⅰ Ⅱ章 17-29節

連日のように大変暑い日が続いていますが、皆様はお変わりなくお過ごしでしょうか。毎日、環境省が発表する「熱中症警戒アラート」が出されていますが、そのような中でも、高校野球の地方予選大会は行われていますし、選手だけではなく観客席も含めて熱中症で倒れる人はいないのかと心配になります。またこの夏も、昨年までと同じように新型コロナウイルス感染症の感染も再び増えて来ています。そんな暑い夏ですが、早くも7月の末となりました。学校は夏休みとなり、各地で夏祭りも開かれる季節です。お祭りの開催方法も、暑さ対策や感染対策などで少しずつ工夫されたり、変更されたりしているのではないかと思います。今年はどうなるでしょうか。

夏のお祭りと言うと、皆様はどんなお祭りを想像されるでしょうか。おそらく各地で昔から行われて来た「盆踊り」も連想される方も多いのではないかと思います。各地によって異なる所も沢山あるとは思いますが、いわゆる「お盆」はご先祖様の霊が戻って来るのを迎えする時とされています。そして、そのお盆の時期を過ごすことによって、今を生かされている私たちが、ご先祖様に思いを馳せ、今の自分たちに至るまでの昔の一人一人を思い出して感謝する、という働きがあるのではないかと思います。亡くなってから既に何十年と経っているような方については、普段はあまり意識することはないかもしれませんが、お墓参りをしたり、お祭りなど何か特別なことをしたりすることを通して、改めてその方のことを思い出す、ということが確かにあるのではないのでしょうか。

教会では、毎週日曜日に礼拝が行われることによって、今から2000年も昔に生きられたイエス・キリストのことを思い出し、そしてそこから今を生きる力を与えられています。私たちが普段礼拝の中で行っているのは、讃美歌を歌ったり、お祈りをしたり、聖書を読んだり、ということですが、イエス様ご自身が「私を思い出して下さい」「私を思い出すために、〇〇してください」と言っていたのは、実は礼拝の時というよりも、食事の時においてでした。

今回の聖書「コリントの信徒への手紙Ⅰ」は、パウロがコリントの教会の人々に

対して書き送った手紙ですが、その 11 章の 24 節と 25 節には、イエス様の言葉として「私の記念としてこれを行いなさい」とありました。この「私の記念として」という表現は、言い換えれば「私の思い出として」、「私を思い起こすために行いなさい」ということが出来る言葉（アナムネーシス）です。そしてイエス様がそのように語られたのは、パンとぶどう酒の分かち合いの食事、しかもいわゆる「最後の晩餐」の席においてでした。そしてそれが後に「主の晩餐」と呼ばれる教会での食事の際に、読み上げられる言葉へと変わっていったとされています。今の私たち日本基督教団の教会では「聖餐式」と呼ばれることが多いですが、古くは 19 節にあるように「主の晩餐」という名前で、パウロ自身も伝え聞かされていたようです。

とは言え、紀元 1 世紀の頃の最初期の教会、集会では、そのパンとぶどう酒は、今日の礼拝の中で行われる「聖餐式」のような特別な儀式としての象徴ではなく、当時の人々の日常のご飯、まさに「日々の糧」でした。イエス様はその生涯の中でも、色々な人たちと一緒に「食事をする」ということを大切にされました。そのことは 4 つの福音書にそれぞれ記されています。身分や職業、性別などによって「清くない」と見なされていた人たち、宗教的にケガれていると見なされていた人たちは差別されていて、「一緒に食事をするなんてとんでもない」と考えられていた社会の中で、イエス様は相手が誰であっても構わずに、食事を必要とする人と一緒に食事をされました。そして、イエス様に従う人たち、最初期の教会に集った人たちもまた、身分や職業、性別などに囚われない、様々な人たちでした。

パウロが手紙を書き送った当時、教会での人々の集まりは、夜に行われていたようです。ですから人々は、日中はそれぞれ普段通りに仕事をして、それぞれが仕事を終えてから、「教会」と言いますか「集会所」となっていた人の家に、各自が食事を持ち寄って集まりました。今の「持ち寄りパーティー」のような感じでしょうか。そして皆で一緒にご飯を食べて、礼拝をしていました。しかし、それぞれが仕事を終えてから集まるわけですから、当然、仕事場が遠い人や仕事が長引いている人たちもいました。それがパウロの手紙の 21 節の言葉です。「各自が勝手に自分の食事を済ませ、空腹な者もいれば、酔っている者もいるという始末」……。つまり、仕事が早く終わって、ご飯をきちんと作って、集会に持ち寄ることのできる裕福

な人たちが、先にやって来て、自分たちだけで先に食べて、酔っ払ってしまっていた。その一方で、貧しくて労働時間も長く、遅れてからしか到着することのできなかった貧しい人たちもいて、その人たちはお腹を空かせて来たにもかかわらず、集会に来てみたら既に食べる物が残されていなかった。そのため空腹のままではいるしかなかったというような状況でした。そのために 22 節の言葉に続きます。「あなたがた（裕福な人達）には、飲んだり食べたりする（自分の）家がないのですか。それとも、神の教会（集会）を軽んじ、（自分で）食事を持参しない人々（貧しい人々）に、（ここに来て食べ物も無い、お前達の居場所は無い、と）侮辱するのですか」……。そんな分裂、分派は決して褒められません、許されませんよ、というパウロの怒りが読み取れます。

続けてパウロは、当時の教会の中でイエス・キリストご自身の言葉として、人々の口から口へと語り継がれていた言葉としての「主の晩餐」、パンとぶどう酒の聖別と配餐の言葉を記しています（24、25 節）。しかし、このイエス様の言葉は、目の前のパンとぶどう酒を、文字通りにイエス様の体と血に変化させるような「呪文」や「魔法」の言葉ではありません。「パンを裂く」という動作や、「赤いぶどう酒」が血を連想させることから、十字架に架けられて殺されたイエス・キリストの死に様を思い出すということ。それが 26 節にある「このパンを食べ、この杯を飲む度に、主の死を告げ知らせる（宣べ伝える）」ということです。「主の死」を思い起こすということは、イエス様がどうして十字架につけられるに至ったかというその生き様を思い出すということと同義です。

ですから、私たちは、教会でパンとぶどう酒の分かち合いをする度に、傷つけられた体と流された血に象徴されるようなイエス様の十字架を思い出すだけではなく、そのイエス様の生き様、言葉と振る舞いとを思い出します。イエス様が多くの人たち、様々な人たちと一緒に、命の糧であるパンとぶどう酒をお互いに分かち合っただけで食事をしたこと、そしてその場に全ての命の源である神も紛れもなく共におられるということを思い出し、確かめ合います。

今回の招きの詞は、ヘブライ語聖書の中から、「箴言」9 章の言葉でした。聖書の中では、目に見えない神は、様々なイメージで表現されています。例えば、王様であったり、勇敢な戦士であったり、裁判官であったり、羊飼いとのもその一

つです。そのような多様な神のイメージの一つに、「知恵」「知恵なる神」というものがあり、この「箴言」9章はその代表と言えます。

¹ 知恵は自らの家を建て／七本の柱を刻んだ。

² いけにえを屠り、ぶどう酒を調合し

さらに食卓を整え

³ 若い娘たちを町の高き所に遣わして

呼びかけさせた。

⁴ 「思慮なき者は誰でもこちらに来なさい」

浅はかな者にはこう言った。

⁵ 「来て私のパンを食べ

私が調合したぶどう酒を飲むがよい」

ここで面白いのは、知恵なる神が選ぶのは、賢い人や、思慮深い人ではなく、むしろ逆に「思慮なき者」「浅はかな者」に対して、「こちらに来て私のパンを食べ、ぶどう酒を飲みなさい」と呼びかけているという点です。そしてそのような「小さくされている者」に対する命の神の選びの視点というものは、ヘブライ語聖書からイエス・キリストにまで一貫している視点です。

パウロがコリントの人たちに宛てて書いた手紙に戻りますが、27、28節にある「従って、ふさわしくないままで主のパンを食べ、主の杯を飲む者は、主の体と血に対して罪を犯すことになります。人は自分を吟味した上で、そのパンを食べ、その杯から飲むべきです」という言葉は、何を意味しているかと考えると、それは「自分の食事、お弁当や持ち物を貧しい仲間と分け合う気があるか、ないか」、その点について自分をよく確かめなさい、と言われているということが、分かるのではないのでしょうか。イエス様の生き様と死に様に思いを馳せることなく、人と人とを区別し、差別するようなあり方、「自分とその周りだけが良ければ、あとは関係ない」というような姿勢、それこそが「ふさわしくない仕方」(27)なのだと思います。

命の糧の分かち合いである食事の度に、「私を思い出して下さい」と言われたイエス様の言葉を心に留め、その後に従う歩みへと、たとえ小さな一歩ずつであっても、私たちは今日もここから神様と共にあって支えられながら、押し出されながら、歩みを進めて参ります。